

UDC 061.62.044.2

所長就任に際して

所長 鈴木 弘



この文章を書いたのは、昨年秋に私が生産技術研究所の所長に就任した頃でありまして、新春のご挨拶にはいささか早い時期ではありましたが、所長という新しい立場から生研を今一度見直した気持は、年の始めに気分を一新して新発足するのと相通じるものもありますので、1月号の巻頭言にしました。

昨年夏には東京大学に改革室が設置されました。2年余も調査と案作りを重ねて来た東京大学の改革が、ようやく実施の段階へ一歩踏み入れたといえましょう。学部教育の組織と方法とが当面の中心課題となっていますが、もちろん研究所が改革の枠外にあるわけではないことはいままでありません。

研究所の改革という言葉は非常に多面的な内容を持っています。問題のとらえ方によって改革の意味が変わるばかりでなく、考える人の立場によって価値観が異なるために改革の重点がちがいます。また、人によって期待する改革程度には差があることはいまでもありません。したがって極端ないい方をすれば、改革というものはそれを考える人の数だけ種類があるともいえますが、大きく分ければ2種類に分類できます。その第1の考え方は研究所を根本的に再検討する立場を取るもので、研究所の設置目的を全く新しく書き換え、必要があれば現存の研究所を廃止して新しい研究所を創設する場合もあり、また一研究所を分割して2以上の研究所を新設する場合や、あるいは複数の研究所の合併もあります。また研究所の性格によっては、大学付属から文部省の直轄とか科学技術庁の所管に換えることもないといえません。第2の種類の改革は、研究所の目的や所属を変えるような根本的な変革は考えないで、現在の目的を一層よく達成するために、その内部組織や運営を改善することです。

生産技術研究所は現在、工学の広い分野にわたって高い水準の基礎研究を各研究室で行なうとともに、必要に応じて数研究室が協力して協同研究やプロジェクト研究を行なう総合工学研究所として活発な活動をしています。このような研究活動は、工学という学問の発展のためには元来非常に望ましい形である上に、大学にとっては教育を主目的とする学部を補って学問の水準を高めて行くためには欠くことのできないものでもあります。しかも日本においては生研のような総合工学研究所は他にありません。したがって生産技術研究所で改革を考える場合には、前記の第2の種類の改革が対象となるのが当然だと私は考えています。

しかし生研外で、一般論として研究所の改革が論ぜられる場合には、ほとんど第1の種類の改革、すなわち根本的な大改革が議題になります。その根拠となっている考え方は、研究所は一定の研究目標を達成するために組織された機関であり、最近の急速な学問の進歩のもとでは、その研究目標は10~20年で置換えるべきである。したがって、その都度研究所は廃止創設を繰返して更新すべきものである、という考え方です。これは一般論としては傾聴すべき考えでしょう。

またこれとは別に東大内の改革に限定していえば、研究所を東大から出して直接国立の研究所とすべしという意見を持つ人がいます。その理由は種々ありますが、企業の研究機関が非常に充実してきたため大学の研究所は不必要になったとか、学部と研究所と2種類の組織が共存することは管理上不適當であるとか、教育の負担が今後ますます増大するので、研究所を学部へ吸収して教育能力を増強すべきであるとか、種々の議論が行なわれています。しかしこれらの意見の根拠となっている考え方には、一面観的な点があり、一般論としても賛成できません。

とくに生研については、その存在が東大の本来の目的達成のために必要なものであり、また工学の発展と進歩のためにも非常に有効であると私はかたく信じています。その理由を詳しく述べることは省略しますが、生研で研究が活発に行なわれ、業績が大いにあがって工学の発展に寄与するとともに、東大全体の研究活動や大学院教育の充実に貢献する実状を現実に示すことこそ、生研の必要性を批判の余地のない安定したものとするでしょう。

第2の種類の改革、すなわち生研の組織や運営を自主的に改善して行くことは、事新しく改革というまでもなく、常時その心構えでいなければならないことです。また生研には設立以来その伝統があるのは喜ばしいことですから、今後も大切に育てていかなければならないと考えています。しかし改革のために現状を大幅に変更する場合には、生研のような大きな研究所で、しかも研究という高度の複雑な機能を営んでいるところでは、種々の面から十分な配慮を事前に払っておかないと、予想しない大きなマイナスを招くおそれがあります。

したがって、一面からの観方や、一部の人の立場からの要求を力で押しつけることは厳に避けて、常に全体としての調和を計りながら進めるよう、生研の皆さんの配慮をお願いします。

今年当面する問題の中の一つという意味で、改革についての考えの一端を披露してご挨拶に代えます。